

つむぐニュースレター

【新潟いのちの物語をつむぐ会 事務局】

〒940-0075 長岡市渡里町 1-2 長永寺（木曾 隆）

電話：0258-33-0804/FAX：0258-39-0804

mail:toueiji47@m2.nct9.ne.jp

ホームページ: <http://inochinomonogatari.com>



第4回例会in南魚沼浦佐



黒岩卓夫さん（医師・当会顧問）

～心の家、そして物語の家～

【基調講演】『私にとっての家とは何か』

もうすぐ！

6/16 (日)

14:00 (開場 13:30)

会場 普光寺

(越後浦佐毘沙門堂内)

新潟県南魚沼市浦佐 2495 番地

上越新幹線・上越線

浦佐駅（西口）より徒歩 5 分

- ◎お勤め・法話 普光寺住職 樺澤賢正さん
- ◎基調講演 黒岩卓夫さん
「私にとっての家とは何か」～心の家、そして物語の家～
- ◎お楽しみ演奏会 高波礼子さん ソプラノ
鬼頭啓子さん キーボード
マクレラン牧子さん フルート
- ◎聴いて話そう、それぞれの思いを（小グループによる談義）
- ◎終了後、懇親会的交流会

参加費：一般 1,000 円 / 会員・学生 500 円

懇親的交流会費（希望者）：3,000 円 / 学生半額

【申込方法】◆添付の振込用紙に 該当番号と金額を記入して合計額を振り込んで下さい。

①例会参加費：一般 1,000 円/会員・学生 500 、②懇親会費 3,000 円/学生半額、

③年会費 2,000 円、④新規入会者は入会金 1,000 円も必要です。

◆または、南魚沼浦佐例会実行委員会・上村宛（萌気会内）:fax025-778-0080 へ申込んでください。

【総括】第2回例会 in 直江津を終えて

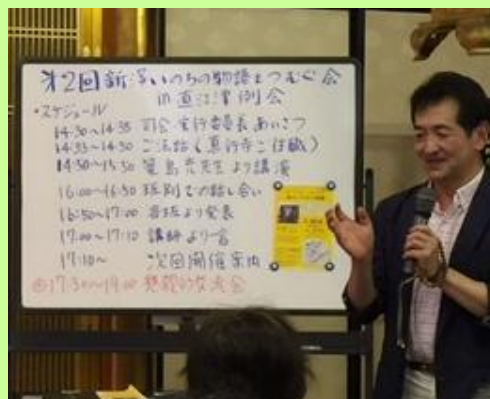
代表 井上陽雄さん(僧侶)

柿崎例会で来られた若松英輔氏が「宗教者が、一つの存在として死者を公に語ることをしなかったことに強い憤りを感じる」と言われました。僧侶である私も、大切な教義を現場に生かしきれていないと思います。

いのちとは何だろうか。人は何のために生まれてきたのだろうか。死をどう受け止めたらいいのだろうか。このような問題は、私達人類の大きな課題です。その課題を公の場で、いろんな方と自由に本音で語れられる場がほしいものです。

この会は、それが可能であるといつも楽しみにしております。この会の魅力は人との出会いにあると思います。

この度の第2回例会で、皆様に竈島医師を紹介したかったこと。竈島医師を皆様に会わせたいと思いました。それが遠近各地より私の知り合いやたくさんの方が来て下さり、本当に嬉しい気持ちになりました。また、この度の会所として真行寺様ご住職・坊守様には心より感謝し、御礼申し上げます。もっともっと時間をかけて多くの方と語り合いたいので、この会を大切にしていきたいと思います。今後も計画していきますので、皆様のご参加をお待ちしております。



ご講師の竈島医師のお話を簡単にまとめさせていただきました。

先生は、医療は頼りないものであり、医療では人は救えないとおっしゃいました。その理由に

- 治せない病気が圧倒的に多い
 - 治っても次の病気が訪れる
 - 老化には何もできない
 - 病気は予防しきれない
- の四つを示され、その後に神道、仏教、キリスト教が死をどうとらえているのかをお話しされました。
- 神道の死は、この世が一番いいところ死ぬと汚い穢れの多いところへ行く。
 - 仏教の死、この世(娑婆)は穢れ多いところ　死ぬと清らかな浄土へ行く。
 - キリスト教の死は、命の終わりではなく天の神から地上での罪が許され、永遠の安息を与えられる。

「与えられたいのちを、懸命に生きる。たとえ今死んだとしても悔いが残らないような毎日を生きる」と竈島さん



やはり生きていく上で信仰は大切ということです。私が先生の話の中で、とりわけ印象に残ったのが、「50代は下り坂 60代は夜道 70代は崖っぷち 80代は氷の上」。私は61ですので、夜道を歩いているということですが、でもその中で、自分のなかで一筋の光を見出すことが大切だということでしょう。また、先生は、三人のお言葉を紹介されました。

○そして私たちが死だと思っているものは、実は死体であり、本当の死ではない

池田晶子

○大休みのなかから　生まれてきて　小安みに中休みをまぜてやりつづけ

さいごにまた、大休みにかえっていく

まどみちお

○明日死ぬかのように生きよ　永遠に生きるかのように学べ

ガンジー

最後に「与えられたいのちを、懸命に生きる　たとえ今死んだとしても悔いが残らないような毎日を生きる」とご自身のお考えをお話しされました。



真行寺中戸ご住職様より法話

「善く老い、善く死ぬ」と竈島先生



4つのグループにわかれて、「聴き」「語り」分かち合いました！



最初の発表は1班の山口さん



話し合い中の3班、奥は4班



発表に耳を傾ける2班のみなさん

4班のみなさん



1班は8人で竈島先生の講演の感想も交え其々看取りの体験を語りあいました。その振り返り談から以下のような3つのキーワードが導かれました。

①「耳は最後まで聴こえている」

意識が無いと言われたが耳元で囁き続ける念仏が聴こえたかの様に次第に表情が安らいでいったというお話に、複数の方が同じ様な体験をしたと語られました。

②「在宅（又は在宅的環境）の看取りは在宅医療チーム等を活用することで本人・家族も安心出来る」

自宅で看とった体験談では、住み慣れた環境で共に過ごせて良かった。更に毎日医師が往診下さりとても安心できた。又臨終の時、家族の思いに寄り添った医師の対応で気持ちが救われ安心できた。と言う話が聴けました。

③「自然に枯れて行く方が楽のようだ」

医師に強制栄養を勧められた時、夫婦でチューブを施す治療はしないと話し合っていたので断ったがそれで良かったのか今でも悩む。に対し同じ様に悩む事はある。自然に逆らわない方が楽だと共感を得られ皆で共有出来ました。
(山口・報告)

第2班は、「老いること」そして「死」に対する自分自身の思いや周囲の人々を見て感じる思いを話し合いました。

老いることを肯定的にとらえ、「楽しんで年をとりたい」という声の一方で、検査をしないと不安で仕方がない人もいる。“いつ死んでもいい”“といいながら、「老化」を認められず永遠に命があると心のどこかで思っている人もいるのではないのか。

また、80-90歳代の人々は、戦争を通して死に直面し、死に向き合ってきた世代であるからか、“最後まで何が何でも生きていきたい”という死生観をもっているようだ
・・・というように、日ごろの体験から、老いや死に対する人々のさまざまな感情があることが語られました。

また、“死にたい”という人にどのように声をかけたらいいのか”という問題提起があり、その答えとなるような魔法の言葉はないものの、“死にたいほど辛い”思いを抱えたその人の話を聴くことが大切であるということを経験しました。
(酒井・報告)



懇親交流会



写真是新潟例会。会場から移動して今井代表一押し・隠れ家的小店へ、、、飲み物は世話人が買い出して運び込み。黒岩夫妻も参加されて盛り上がりました。

直江津例会交流会(写真なし)は「食品ロス削減」をうたい事前申込制で割烹の仕出し弁当で、片付けも簡単でした。真行寺坊守さんは、「紙コップ嫌いなの」と麦茶や熱い茶、冷たいお茶を次々と素敵な茶碗に入れて下さり心地よい一日でした。(写真・文:小出)

【総括】第3回例会 in 新潟によせて

代表 今井洋介さん（新潟県立がんセンター新潟病院 内科）

2018年11月17日（土）新潟市中央区木場教会にて第3回新潟例会が開催されました。

新潟例会の準備を始めるにあたり、まず思い描いたことは、「新たな仲間作り」です。新潟市在住の世話人、今井、中塚英樹氏、高野和巳氏、橘勇人氏、西川薫氏に加え、新たに、井上真由美氏、金谷光子氏、日比野則彦氏に新潟例会の実行委員となって頂き、月一回のペースで会合を行いました。毎回熱のこもった検討がなされましたが、それぞれみなさまのお話が興味深く、毎回の会議は「あっという間」でした。

「いのちは、つながり」をテーマとし、日比野則彦・愛子夫妻にポスター作製とミニ・コンサート「天上の音楽」。基調講演として、井上真由美さんより「生まれた場所で逝く～生命の連鎖」。講演として高野和巳さんより「逝く準備～僧侶である行政書士が語る、アドバ

ンス・ケア・プランニング」をお願いしました。そして、今回は、基調講演の中から重要なテーマを抽出し、参加者それぞれに、語り合いたいテーマごとにグループを作ってもらい、世話人、実行委員の進行のもと、自由な意見交換をして頂きました。

二つの講演は、いずれも期待を大きく超えるものであり、生命、縁というものの不可思議さ、唯一無二の尊さが腹の底に落ちるような素晴らしいものでした。

日比野夫妻の演奏は、木場教会の本堂全体、そしてわれわれの心に響き、染み渡りました。すっきりとした表情で、各グループのみなさんは、はじけるような楽しい笑い声を響かせながら、前のめりに、それぞれのテーマについて真剣にお話しを交わしておいででした。このような場をつくりあげることができた実行委員会のみなさま、そしてバックアップ頂いた世話人のみなさまを心より敬服致します。

今後も、良い会がつむがれていくことを願ってやみません。



橘勇人さんの読経

受付三人衆（中塚・木曾・関谷）



【基調講演1】 “生まれた場所で逝く～いのちの連鎖～”

井上真由美さん（看護師）

いま、ここに生きている私たちは全て、母の胎内で心臓の拍動を始めました。「奇跡の一拍目」。
これを起こすために母側から血液の粒を受け取って心臓を完成させることがわかっています。この命は受け取ることから始まりました。それは「生きなさい」という愛のギフトだと思います。受け取った愛をいっぱい育てて、死ぬときに渡して逝けたら。私自身そのように死を迎えたいし、誰かの死の時に可能な限りそうであるように支えられる医療者でありたいと思っています。

今は「病院で産むことが当たり前」の時代になりました。それは「病院で死ぬことが当たり前」の時代へと結びつきました。命の始まりも卒業も、家族の手から離れてしまったことは、この時代を生きる子どもたちの死生観に影響を起し始めています。「人はいつか死ぬと思うか？」という質問に「死なない」と答える子どもたちが20%近くもいるのです。

病院で産むこと、死ぬことが「当たり前」となった価値観によって、「どのように産みたいか、どのように死にたいか」という自己決定を希薄させているように思います。「お任せします」という医療との付き合い方によって、自分や家族の命への尊厳と責任が弱くならないように支えたいものです。

本来、命の始まりと仕舞い方は、家族から学ぶことではないかと思います。私自身も子どもの頃あんなに若くてなんでもできると見上げていた母と共に生きながら、今、「老いるということ」を見せてもらっています。いつかあなたもこうなるのだと、それは最後のプレゼント。

*長尾和宏医師著「老いるということ」を朗読させていただきました。

私は14年くらい前に「親は子どもにとって最高のタイミングで死ぬ」という言葉と出会いました。信じたわけではなかったけれど、ずっと心に残り続け、考えてきた言葉でした。そんな中、4年前山口県に住む父が肺炎を悪化させ死に向かい始めました。新潟から仕事を調整しては何度も通って父の看病をしました。父が息をひきとるときにはそばにいて、声をかけてあげたい、手を握ってあげたい、体をさすってあげたい、最後の脈を取ってあげたい、ありがとうっていっぱい伝えたいと、あんなにも願っていたのに、父は私の到着を待たずに息を引き取りました。

「自分が本当にやりたいことを選ぶ人生を送りなさい。やりたいことができなかった時の心の痛みを忘れるな。」これは父からの最後のプレゼントだったように思います。いろいろなことを背負い、本当にやりたいことから外れかけていた自分の人生の軌道修正に勇気が出せました。

もちろん例外はあると思いますが、「親は子どもにとって最高のタイミングで死ぬ」という言葉は、私の死生観の一部になり、私自身が自分の死を思い巡らせる時、大きな安らぎになっています。

更に私ごとですが、21年前に長女を自宅出産しました。病院出産予定だった私が、それでも私らしいお産の希望を主治医に見てもらうために書いた「バースプラン」がきっかけで、助産師さんとのご縁が繋がり、予定日1ヶ月前に自宅出産が決まりました。自分が願うお産ができるように、日々の運動や体のケアなど、自分で背負う責任も前向きに取り組むことができました。ある意味での私のわがままに付き合ってくれた家族たちは、自宅での命の誕生に立ち会うことで、それぞれの人生に大きな成長を果たしていました。



「親は子どもにとって最高のタイミングで死ぬ」という言葉は私の死生観の一部に、と井上さん

心の中にあるだけでは変わらなかったことが、「こんな風に産みたい」と表現して伝えたことで実現した経験は、「こんな風に死にたい」と思った時、どうすれば良いかという学びになりました。いい意味で遠慮なく、家族を巻き込む、そして、実現するように自分で背負える責任に前向きに取り組む、ということ。その姿が、私が渡せる「最後のプレゼント」になると信じるからです。

＊自分の「死のプラン」を朗読させていただきました。

【基調講演2】 逝く準備

～法的手続としてのアドバンス・ケア・プランニング～

高野和巳さん（行政書士・僧侶）

◎一切皆苦とは「人生は思い通りにならない」ということ

お釈迦様が残されたお言葉「一切皆苦」とは、人生すべてのことが苦しい、と理解するのではなく、人生は思い通りにならない、と理解するものであると考えております。このお言葉は「私」の人生における大前提であり、真理であると考えております。

ただそうであったとしても、せめて安心して死を迎えられるように・・・と願っても良いのではないのでしょうか。

昨今、「私」の死に対しては、事情が激変してきております。高齢社会、さらには人生100年時代などと言われるようにもなりました。

「私」が死を迎えるまで、病気にかかり、認知症になり、体が不自由になっていく。そんな「私」はどう生活をしていきたいか、どれほどの治療が必要なのか、どう死を迎えたいか、を事前に考えておかななくてはなりません。

なぜなら、もうその状況下では「私」は「自分のことを自分で」まともに出来なくなっているからです。そして、「私」が死を迎えた後は「私」はもうこの世に存在しません。

遺された家族・子供たちに「財産はこことここにいくらかあるんだよ。そして、この財産はこう分けるんだよ。決してケンカなんかしないんだよ。」と直接指示し伝えることは出来ないのです。

だからこそ、「私」が活着しているうちに、さらに元気なうちに、病気になってから・体が不自由になってから「私」はどう生きたいか？どう死を迎えたいか？死を迎えた後、葬儀は？納骨は？法要はどうしたいか？「私」の財産をどのように遺したいか？など「私」の想いをきちんと残すべきと考えております。その方法が、見守り委任契約・任意後見契約・遺言書・死後事務委任契約などの法的書類となります。

そして、その法的書類をすべて公正証書として作成しておくことが必要です。そこまでしなければ、「私」は簡単に死を迎えられない世の中となりました。残すべきものをきちんと準備し残しておくことは、今を生きること、安心して死を迎えること、さらには遺された家族・子供たちが安心していられることにつながります。

ご準備は、出来る範囲でかまわないと思います。私自身、年に3～4回、個人の遺言書に加え、業務の引継ぎ事項の遺言書を書き直しております。

合掌



「私」はどう生きたいか？どう死を迎えたいか？・・・「私」の財産をどのように遺したいか？など「私」の想いをきちんと残すべき、と高野さん

以下は、日比野則彦さんより報告

＜コンサート部＞出演 日比野愛子さん（ソプラノ）、日比野則彦さん（サクソス）

井上氏・高野氏の「生まれるいのち・看取るいのち」の講演を受けて、20分間のコンサートを行った。

はじめに、日比野が新潟での歩みの中でとても暖かい支援を受けた方が亡くなった際にプレゼントした曲「いのちのしずく」を演奏した。泉の水がやがて天に帰り、雨のしずくとなって地を潤すように、人のいのちは、その人が注いだ愛の先に、育まれ絶えることなく続いていき、決して虚しく終わることはないことを歌詞に詠んだ曲である。また、人が生まれてから天に帰るまで、多くの人に愛し愛され、人生の試練困難の中で支えられ過ぎていく様子を走馬灯のようにまとめた映像をバックに、「君は愛されるため生まれた」（幼少期）「You Raise Me Up」（青年期）「Amazing Grace」（老年期～天への凱旋）を演奏した。

「いのち」について、何のために生きているのか、について、価値観、また宗教によっていろんな捉え方があることを認めつつ、その違いを超えて一致できる点があるとすれば、「私たちは愛されるため生まれてきた」という事実ではないだろうか、と問いかけた。



＜分かち合いの部＞

コンサートに引き続き小グループによる分かち合いの時間が持たれた。講演の内容に準じ、

1) ファーストタッチ・ラストタッチについて 2) 主体的なお産について 3) 死は最高のプレゼント 4) 子にとって親の最高の旅立ちとは 5) 自己責任と、それに対してどう生きるか 6) 家族の安心のための入院について 7) 人が本来持っている自己治癒力について 8) 死のプランについて の8つのテーマが提示され、参加者が自分の望むグループに加わる、という形で班分けが行われ、40分ほどの話し合いの後、各グループによる発表の時間が持たれた。

1) ファーストタッチ・ラストタッチについて と 2) 主体的なお産について の2グループからは、「親たちがどう生きたいか・死にたいか」を考えるとときに、嫁・姑の関係の問題が深く横たわっており、なかなかその問題が切り出せない現状があることが語られた。



ラストタッチについては、生から死に業務的に切り替わるのではなく、肌に温もりのある間「いのちの続き」に関わると良いのではないか、という意見があった。また、自宅出産を家族が見ていて、その家族が次の出産を手伝うなど、生まれる前から親子が繋がっているということが感じられたという意見があった。

3) 死は最高のプレゼント のグループでは、自宅で介護をし看取ることが亡くなる方の気持ちを受け渡す場になっている、という意見があった。また、がん患者が、主治医と結果的なことしか話せず、相談がしなかった、という意見があった。

4) 子にとって親の最高の旅立ち のグループでは、親の死から何を感じ、どのように自分の中で解釈し、自分のものにしていくかの意味づけが必要、という意見があった。

5) 自己責任と、それに対してどう生きるか のグループでは、嫁・姑の問題に長く苦しめられ、最後にそれを整理し見送りをすることができた例が語られた。

また先祖が戦争でご遺体がないことから、自分の先祖がひとりでもかけてしまうと今自分がここにいる、自分の役割はいのちを紡ぐことだ、という意見があった。

6) 家族の安心のための入院について のグループでは、7年母とともに父を在宅介護し、その後施設





入居で亡くなった方の例が語られ、施設入居に踏み切る際ケアマネとの相談の結果難しいという判断を受け入れたことで、ほっとした、ということが語られた。亡くなる方は人に迷惑をかけたくない、という気持ちが強くあるようである。

また自宅看取りが進まない理由として、死が怖い、苦しんで死んでいくのを見るに耐えられず最後に救急車を呼んでしまう例が語られ、死に対する教育を施設などが積極的に行い、医師に「大丈夫だ、サポートがある」と一押しして頂けるような在宅の看取りができる環境整備が必要、という意見があった。

7) 自己治癒力については、自然治癒力があることを認めることが出発点であり、それを有効にすること・邪魔をしないこと

が大事だという意見があった。具体例として肝臓癌で2回手術したのちに登山をした「生きがい療法」の例が語られた。

8) 死のプランについて のグループでは、死のプランの確認が本人に取れないまま終末期を迎えてしまい、遠くの親戚が病院死を勧め、本人の意志が確認できなかったことが心残りであった例が語られた。また、医療車より、ほとんどの家族は「精いっぱいのことをしてください」というが、本当に必要だろうか？それよりも、後期高齢者の保険証の裏には、臓器移植のことではなく延命治療の有無などを書いた方が良いのではないだろうか、という問いかけがあった。

家で死にたいと希望する方は多いが、たくさんの人に看取られた方は幸せだと感じているようだ。手厚いケアを受けられる施設もあるので、必ずしも場所にこだわる必要はないのではないか、という意見があった。



4 時間にわたる長丁場の会であったが、非常に密度の濃く感動の多い会であったように思う。最後の分かち合いで帰られる方が多くあり、分かち合いの時の価値を、事前にしっかり伝えつつ、もう少しコンパクトなタイムテーブル設定が必要ではないか、と感じた。



【第3号】 新潟いのちの物語をつむぐ会

発行：2019年（令和1年）5月1日（水）

◇新潟いのちの物語をつむぐ会 会則◇

（名称）

第1条 本会は「新潟いのちの物語をつむぐ会」（以下は本会という）と称する。

（目的）

第2条 本会は、誰の身の上にもある生老病死について、市民、医療・福祉関係者、宗教者等が一堂に集い意見交換を行い学びあうことによって、これらを自然の営みとして穏やかに受け入れる心の醸成といのちの尊厳についてのより深い理解を共有し、いのちの物語をつむぐことを目的とする。

（事業）

第3条 本会は前条の目的を達成するため、例会開催、会員ニューズレターの発行等の事業を行う。

2、いのちを見つめる友との出会いの場、お互いのこころの交流ともなる活動等を行う。

（会員・入退会）

第4条 会員は第2条の目的に賛同し、入会金、年会費を納入する。

2、会員は事務局に申し出ることによって随時退会できる。但し既納の入会金、会費は返還しない。

3、正当の理由なく年度末までに会費を納入しない場合は退会したものとみなす。

（世話人）

第5条 会員の中から世話人を選出する。

2、世話人および世話人会は手弁当での活動とする。

3、例会企画運営やその他協議事項ある時には世話人代表が招集し協議決定する。

（世話人代表及び事務局等）

第6条 本会に世話人代表を3人置く。

2、世話人代表は、世話人互選により市民、医療・福祉関係者、宗教者より各1名選任する。

3、世話人の任期は2年とする。ただし再任は妨げない。

4、世話人代表は、原則として世話人の中から事務局員・庶務担当・会計担当及び会計監査役を指名する。

5、事務局員、庶務担当者、会計担当者をもって事務局を構成する。

6、会計担当は会計報告を年1回行う。会計監査はこれを監査する。

7、本会に顧問を置くことができる。

（収支・会費）

第7条 本会の収支は会員の入会金、年会費、例会等の参加費、カンパ等で賄う。

2、本会の入会金は1,000円、年会費は2,000円とする。ただし学生・子育て中の者等で配慮を要すると認める場合は、会費を減額する。

3、個人および法人からのカンパは随時受け付ける。

（例会の開催要件）

第8条 例会の開催に当たっては次の要件を満たした内容とで実施する。

①プログラムの構成は、生老病死全般にかかわることを主なテーマとし、参加者がフラットな立場で発言できるように進行運営を心掛ける。

②講師・シンポジスト等発題者は、本会の活動目的を良く理解した人を選出する。

③原則として、例会終了後は懇親交流会を開催し、会員、講師等による相互の意見交換・交流を行う。

④例会は寺院・病院・公共の施設等での開催を原則とする。

（事業・会計年度）

第9条 本会の事業・会計年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

（施行・改正）

第10条 本会則は平成29年7月1日から施行する。

2、本会則の改正は、世話人によって協議決定する。

★事前申し込みにご協力ください。

払 込 取 扱 票										通常払込料金 加入者負担			
02													
口座記号						口座番号				金額		千 百 十 万 千 百 十 円	
0 0 5 6 0 5						1 0 3 0 7 4							
加入者名 新潟いのちの物語をつむぐ会										料金		備考	
◆添付の振込用紙に 該当番号と金額を記入して合計額を振り込んで下さい。 ①例会参加費：一般 1,000 円/会員・学生 500 、②懇親会費 3,000 円/学生半額、 ③年会費 2,000 円、④新規入会は入会金 1,000 円も必要です。(振込料金は不要)													

各票の※印欄は、ご依頼

記載事項を訂正し、切り取らないで

【寄稿】「いのちの物語」を紡ぐとは

顧問 黒岩卓夫さん（医師）

「医療の心を考える会」から「いのちの物語を紡ぐ会」に会の名称を変えた。この会名について気の向くままに書いてみようペンをとった。会名にはそれぞれの思いが込められていたのも事実だ。

考える会という、お互いに共通テーマを出して、考えて話し合うということだと思う。では“物語を紡ぐ”とは何だろう。意味は他人のことではなく、自分のいのちの物語に分け入って改めて見つめてみようということになる。

“考える会”から“物語を紡ぐ会”に変わったことは一言で言えば脱皮とか変態になるだろうか。あるいは孵化と言う卵がかえるイメージだろうか。いずれにせよ生き物の成長では大きな節目になる。

そこで紡ぐという言葉からつついてみたい。「紡ぐ」は三省堂の辞書（典）によれば「綿・繭をつむ（紡錘）にかけ、繊維を引き出して糸にする」とある。諸橋轍治の大漢和辞典では中国での故事来歴として説明されている。「紡、以糸車絡糸欲其緊也」

原義は、辞書にある通り、綿や繭から1本の糸を紡ぎ出すことだと思う。私はむしろ糸から布を織り成すイメージを持っていた。しかし綿や繭といった植物のつくった綿のかたまりや虫のつくった蛹から引き出した1本の糸にこだわったほうが、無限の可能性を秘めているのではないか。1本の糸を糸車に巻き取り、2本を撚り合わせて強い糸に変身させることから始まる。縦糸横糸が多様に自由に色彩も加えて、線から面へと伸展して行く。

その始動として1本の糸を紡ぎ出すこと。それが「いのちの物語」の芽を生み出すことになる。

一方、卵からかえる、卵から生れることを孵化するという。この孵化することを魚沼の方言では「はやける」という。

私はこの方言が気に入っていた。「はやける」は柔らかく暖かくしかも素早く動くイメージがあった。鳥類では可愛らしい雛鳥が生れてくる。

さて本題に戻ってペンを置きたい。「いのちの物語を紡ぐ」を改めて眺めてみよう。“いのち”と“物語”と“紡ぐ”はそれぞれ独自の素晴らしい意味をもっていると思った。いのちの素である1本の糸を紡ぎ出すところ、そしてひとつの物語を共有共鳴することに期待したい。

井上円了没後100周年記念講演会

日時：6月8日（土）13：30

会場：長岡市立中央図書館講堂

聴講無料・要申込 0258-92-5910

次回 第5回例会 in 長岡

日時：11月24日（日）14:30

会場：長永寺（長岡市渡里町1-2）

＊17:30 より懇親的交流会

新潟いのちの物語をつむぐ会

会 員 募 集 中

誰の身の上にもある生老病死について学ぶ活動を続けています...

《編集後記》例会2回分をまとめた第3号をお届けします。

新潟例会の「分かち合い」は日比野さんが聞きながらPCで原稿起こしを下さいました。例会当日は聞いているようで聞いていない私は編集作業をしながら復習。例会は市民、医療・福祉関係者、宗教者がフラットにフランクに語り合い聴きあい学びあいの「場」でした。日頃忙しい方々も共に汗して作り上げる「場」で、善き友との出会いの場でした。ただいま会員募集中です。お気軽にどうぞ！（小出）